

始



特116

587

理学博士田中正平先生校閲

# 箏曲楽譜

姫 松 さくら

四季の花 ほたる

花くらべ 歌の道

手ならひ 新年の雪

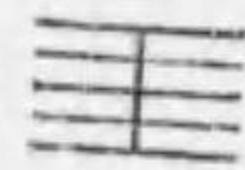


(第壹編) 落合康恵編





47116  
587

凡 例

- 五線譜表は音の高低の位置を表はすもので上部になるほど順次音が高くなります。
- 此の譜表では線上は申す迄もなく線と線との間も用ゐられ夫れ以外の音の爲には五線の上下に加線し随時に其の範圍を擴げて行くのであります。(五線の名稱は別項説明欄にあり)
- 譜表上の音符は二様の色分としました。而して黒音符は箏の手を、又赤音符は唄の節を書き表はしたのであります。
- 此の音符は符頭○及●と符尾|ㇿㇿより成つて居りまして符頭は音の所在を示し、符尾は長短の間取りを表はすのであります。(此の詳細は別項説明欄にあり)
- 譜表の下へ横に記しました歌の文句は總べて音譜通りの間に配置し、尙ほ假名と假名との間の横線は産字を示しㇿは息繼の記號であります。
- 文句は假名遣ひ法に依らず總て唄ふ時の發音通りに記して置きました、練習者は別頁の歌詞を先きに素讀される事を望みます。
- 譜表上の縦線  は間拍子の句切りで此句切りの中を小節と申します。此の小節は、表間と裏間の二拍子  より成つて居りまして譜表の冒頭に附した  $\frac{2}{4}$  は曲が二拍子であると云ふ事を示したので、節、産字、手法などで、音符が種々の形に割れる場合があつても  の類の各小節は平等、即ち雨滴拍子の間で進むのが本體であります。

大正  
11. 7. 26  
内書

理學博士 田中正平先生校閲并序  
落合康恵女史著

五 線 式  
三 味 線 樂 譜 解 說

定價金 壹圓 送料金 六錢

在來の稽古法の如く記憶のみに依る時代は既に去つて、今は樂譜に依らねばならぬ時代となつた、此の時に當つて落合先生が本樂譜解説を編著せられたのは實に機宜に適したるものと云ふべきである。記憶のみに依る時は、大金をかけて習つた人の悉くが少くとも殆ど全部に近い人は大抵忘れて了ふ。此れに反して本樂譜に依つて習つた人は全部少くとも殆ど全部に近い人は全く忘れやうとしても忘れる事が出来ない。之れが五線式三味線樂譜解説の世に誇るべき特色である。それと、も一つは本樂譜に依つて邦樂が一躍世界的となつた事である。速に一冊を手にして其の眞價を認められたいものである。左に練習樂譜の曲目を掲げる。  
丹頂の鶴、萬歳  
姫松、さくら、四季の花、ほたる、手習ひ、



平調子 調絃法

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	爲	巾	.....	絃名
+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	.....	音符
7	3	4	5	7	1	3	4	5	7	1	3	4	.....	音名
+	ミ	ヤ	イ	ナ	ヒ	ミ	ヤ	イ	ナ	ヒ	ミ	ヤ	.....	音符讀方

○音符の上に附しました一、二、三……斗爲巾は在來の箏の絃名で早分りする場合もあらふかと参考迄に附しました。又其の上に示しました○は半押(半音高まる記號)◎は本押(一音高まる記號)◎は強押(一音半高まる記號)であります。

♩は譜の調子の根本を定める記號であります。

○音符の上、又は音符の側に附しました1は右手の拇指2は食指3は中指等の指遣ひの記號でハはハジキVはスクヒの記號であります。

以上は此の箏譜の概略を述べましたに過ぎません詳細は別項の箏譜説明に述べてあります。

此の箏譜は其の基礎音を箏の一の絃に取り、箏の調子が更りても譜は大體其儘とし、見易きを旨としたれば各調子、平調子、雲井調子等が一致し且つ汎く世に行はれて居る三味線の譜とも共通になつて居りますから、此の箏譜を會得する事は聽て三味線を稽古せらるゝにも至極便利であります。

平調子 ひめまつ

全曲の調約二十秒間



# さくら

平調子

全曲の調約四十五秒間

七 七 八 七 七 八 七 八 九 八

さくら さくら やよいの

七 八 七 六 五 四 五 六 一 五 四 三

そら わ み わ た す か ぎ り

か す み か く も か に ほ い ぞ

十 十 九 八 七 七 八 七 七 八

い づ る い ざ や い ざ や

十 十 斗 斗 十 六 五 十 六 五 十

み に ゆ か ん

六 五 十 九 八 七 八 八 七 六 五

23

# 四季の花

平調子

全曲の調約三十五秒間

は る わ は な な つ わ

た ち は な あ き わ き

九 十 斗 斗 十 九 九 十 九 八 七 六 五 三

ふ ゆ わ す い せ ん む

八 三 二 斗 斗 斗 十 九 十 五

ろ の ん め



# ほたる

平調子

全曲の調約五十五秒間

十五 斗十 九八七 八十九 八七 六五 六  
 きよ—き—、な が—れ—の—、い  
 七 八 九 八 七 六 五 三 斗十 斗十 九 十  
 き—ら—が—わ、たも—と—、す  
 六 斗十 九 八 九 十 斗十 斗十 斗十  
 ず—し—き、ゆ—う—ぐ—れ—に、ほ  
 斗十 斗十 斗十 八七 八三 七 六 五 七 八  
 たる—とぶ なり—、い ざ や を さ  
 九 八 九 十 九 八 七 八 七 六 斗十 九 八  
 なご—とりてあつ めてよもすがらま  
 九 八 七 八 三 斗十 斗十 斗十 斗十 九 十 十五  
 どの、ひかり に、ふみ—を—み—よ

# 花くらべ

平調子

全曲の調約四十秒間

九 九 九 九 九 八  
 んめ—の—、しろ—た—ま、  
 七 八 九 十 斗 斗十 九 八 七  
 さく—ら—の—に—を—い、  
 七 八 九 九 九 九 八  
 もも—の—、うす—い—ろ、  
 九 八 九 八 七 八 九 七 六 五 九 十 斗 斗  
 こ—き—ま—ぜ—て、はるの  
 十 九 八 七 八 九 十 九 三 三 八 八 六 七 八 三  
 あや おるいとやなぎ



# 歌の道

平調子  
全曲の調約一分間

十五 十 五 五 十 十 九 八 七 八 七 六 五  
う—ぐ—い—す—も

七 八 九 九 九 八 八 九 十 十  
—' かわ—ず—も—' うと—を—'

九 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
うたの—み—ら' つき—ゆ—き

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
' はな の—をり' を—り—わ'

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
こ—こ—ろ—う—ら—ら—に—う—た—

十 八 七 八 九 十 十 十 十 十 十 十 十  
え—' た—の—し—め—'

# 手ならひ

平調子  
前弾  
全曲の調約一分間

七 八 九 二 十 八 三 二 二 七  
て—な—ろ—を—

九 九 八 九 十 十 十 十 十 十  
ち—ご—よ—' な—に—わ—づ—に—'

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
さ—く—' や' この—は—な—ふ—ゆ—

五 九 十 九 八 九 十 十 十 十 十 十 十 十  
—ご—も—り' い—ま—を' は—る—べ—と—'

五 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
も—じ—の—は—な' ふ—み—の—は—や—

八 七 六 五 七 三 八 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
し—に—' か—を—ら—せ—て—み—よ—'



# 新年の雪

平調子  
前弾

全曲の調約一分四十秒間

三 七 三 三 八 九 十 十 九

八 七 十 九 八 七 六 五 十 五 八 三 六

み わ —

八 三 三 八 八 九 十 十 十 十

— た — す — , — か — ぎ — り — の も ,

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

や — ま — も ' は — る — に — し — ら — れ

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

— ぬ — は — な — さ — き — て — , — ひ — と —

八 八 十 十 十 十 十 十 十 十

よ — の — , — ほ — ど — に — あ — た —

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

— ら — し — き ' と — し — と — な

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

し — つ — る — , — け — さ — の — ゆ —

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

き ' た — の — み — お

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

を — か — る ' よ — の — さ — ま — も '

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

さ — や — か — に — み — え — て ,

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

めで — た — し — や — ,





5 — 3 — 1 — 5 — 3 — 1 — 2 —



— 2 — 1 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10 —



1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10 —



1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10 —



1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10 —



1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10 —



## 序

箏曲は我邦樂中最も優雅なるもの、一にして其の國民の音樂思想を涵養するに與て効あるは言を俟たざる所なり而して從來行はるゝ之が教育法は甚不完全にして殆んど原始的なりと言ふも誣言にあらざるは當代の大恨事と謂はざるべからず編者落合女史は故山登萬和師に師事して箏曲の蘊奥を究め又三絃の名手として名聲噴々たるのみならず箏曲の教授に多年の經驗を有せり今此の譜本を公刊し以て名曲を具に後世に傳ふると共に子女の音樂薰育に便にし斯界の不備を補はんとす其の志や美にして其の勞や多とせざる可からず。

抑も西洋式五線譜を以て箏曲を記録するに當り先づ解決を要する根本問題二あり其の一は之と三絃樂譜との聯絡如何にして他の一は箏の手と唄の節との併記方式なり編者は嘗て予に諮るに此の二問題に對し採るべき態度如何を以てせり而して遂に本編の記譜法を採用するに至れるに對しては予は編者と共に其の責任を分たざるべからざるものあるを以て茲に聊か之を辯せんとす。

本編に採用する所の記譜法は五線の下部に亘り數多の補助線を要し隨て符號識別上の困難を増すのみならず寫譜印刷に不便を生ずるの短所あるは否む可からずと雖三絃及之を伴奏器とする本邦聲樂の記譜法にして既に世に一定せられあるものに合致するの長所ありて一たび本編の樂譜に通せば樂譜に依り勞せずして三絃樂は勿論本邦歌謠の大部に通じ得るの便宜ありて其の應用の途廣汎なるの利益あり次に聲樂と伴奏器樂とを併記するには兩者の譜を個々に作製して上下二段に之を連置するを本則とす而かも此の種の二段樂譜は見透頗



る困難にして特に練習の功を積みたる上にあらざれば之を活用し得べからず且我邦の聲樂の如き音聲と拍子との關係複雑微妙なるものに在りては其の困難一層大にして初心者之が活用を期待し得べからざるは經驗の實證する所なり故に本編に於て唄の節と箏の手とは之を同一譜表に收め異なる色を用ひて兩者の區別を明にせるは著しく讀譜の勞を減じ初心者をして早く唄に親しましめ其の妙味を感受せしむるの効果ありて編者が印刷其の他の困難を排して此の理想を實現せんとするの英斷は大に之を稱揚せざるべからざるなり。

本編載する所の譜曲は具に山田流の精華を體現して餘す所なく音符並に彈奏法の説明も亦簡明にして頗る要を得たるものあるを認む想ふに此の事業の完成は本邦音樂教育上に一新紀元を劃すると共に邦樂研究上に好資料を齎らし新界を益すること甚だ大なるべし茲に蕪辭を以て序とし衷心此の美舉の將來を祝福す。

大正六年十二月

田中正平

### はしがき

お箏の譜につきましては昔の方も餘程御苦心になつたと見えまして色々の様式で書き遺されてをりますが、近頃御箏が目立つて流行つて参りましたのに連れて譜本の出版されたものが幾種となく見受けられる様になりましたのは誠に悦ばしい次第で御座います。このやうに譜本が澤山出ますやうになりましたのは畢竟これから先きは御箏をお習ひになるには樂譜に據る事が、一番捷徑であると申す事が一般に認められた結果で御座いませう。私は前々から御箏に譜を應用いたして忘れぬ爲めの用心に、それより進んではお稽古も容易く充分に出来るものを得たいと考へつきまして、昔から傳はつてをります譜本を種々調べて見ましたが何分にも極く細かな點迄も書き表はす事が出来ませぬのを歎いてをりました矢先に、田中博士は久しい以前から五線音譜をあらゆる三味線樂に應用なすつておいでになりましたが御箏の方迄御研究を御進めになつたものを私に御授け下さいまして、それを實地の御稽古に應用して、汎く習ふ方の爲めに極く手軽にその上に確かな教へ方を研究いたしますやうにとそれは、御熱心な御勤めを受けました。それから後、私は先故山登萬和先生の御懇篤な御指導によつて御教へを頂いた御箏と三味線とに譜をつけて演奏や御稽古に永年試して見まして、一方ならぬ便利を得ましたので御座います。そこで樂譜の恩恵を皆様方にも御分け致し度い希望



から此度御箏の分丈けまづ版にさせる事に致しました。もし仕合せに皆様が此譜を御用ひになつて御箏ばかりでなく進んでは三味線の御稽古までも、御出来になる様になりましたならば、私の悦びは此れに上越すものが御座いませぬ。

大正六年師走中旬

落合康惠

### 箏譜説明

先づお箏を此譜に就てお稽古なさる方の爲に、音符とお箏との關係を左に申し述べて置ませう。此譜の書き方は、世界一般共通のものであります。音の高低を表はす譜表は五線で成立つて居ります。

此の譜表では、線の上と線と線との間に音符を用ゐて都合九つの異なる音を夫々區別して表はす事が出来ます。其の外一番上の線の直ぐ上の間と一番下の線の直ぐ下の間とを用ゐて、尙二個の音を加へることが出来ます。下より數へて下の間、第一線、第一の間、第二線、第二の間と順に數へ、上になる程、高音になります。

然し此十一個の位置のみではお箏や唄に用ゐます音の全部を書き表はす事が出来ません。其外の音は臨時に五線の上下へ短き線(加線と云ふ)を加へ、之によつて出来る間をも用ゐて音の範圍を下圖の如く擴げる事が出来ます。



加線

譜表



平調子調絃法

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 斗 爲 巾 …… 絃名  
音符

7 3 #4 5 7 1 3 #4 5 7 i 3 #4 …… 音名  
ナ ミ ヤ イ ナ ヒ ミ ヤ イ ナ ヒ ミ ヤ …… 音符讀方

りになります。

平調子調絃法とは、お箏の絃の調子の合せ方で、上圖は、此調子に合せ  
る絃の音を、音符を以て表はしましたので、其下に記しました數字は、音符  
の名でありまして、其讀み方は下に附けてある假名の通りであります。其  
他種々の調子があります、平調子は手ほどきに用ゐる調子でありますか  
ら、先づ最初に其記譜法を記す事にしました。お箏の十三本の絃で、一  
の絃と五の絃は、普通同音でありますからつまり上圖通り十二の音しか出ま  
せん。しかし、お箏の曲にはこれ以外に澤山の音が必要であります。其音  
は主に絃を、左の手で押して臨時に出すのでありまして、之を押手の音と  
申します。左の符表には此押手の音と記號とを記してあります。其内の縦  
線の附いてある音符は絃其儘の音で縦線の無い小音符で記してあるのが押  
手の音であります。

一の絃は五の絃と同じでありますから見易い様に横線の兩端へ鍵形を附し  
て一見一と五との區別がつく様に記してあります。

甲 十二音

7 1 #1 2 #2 3 4 #4 5 #5 6 b7  
ナ ヒ ト フ タ ミ ヨ ヤ イ ツ ム ナ

中 十二音

7 1 #1 2 #2 3 4 #4 5 #5 6 b7  
ナ ヒ ト フ タ ミ ヨ ヤ イ ツ ム ナ

呂 十二音

7 1 #1 2 #2 3 4 #4 5 #5 6 b7  
ナ ヒ ト フ タ ミ ヨ ヤ イ ツ ム ナ

右に述べました線と間と、加線等へ、音符を配置しますれば、左の様になります。

右は、  
六音であります。尤もお箏では、右に表はした文の音を皆遣ひません。普通一音なり、二音なり、飛  
ばして用ゐることになつて居ります。今之を平調子の一から巾迄の絃にあて嵌めて見ますと、次の通

右は、  
六音であります。尤もお箏では、右に表はした文の音を皆遣ひません。普通一音なり、二音なり、飛  
ばして用ゐることになつて居ります。今之を平調子の一から巾迄の絃にあて嵌めて見ますと、次の通

の間で半音を以て進んで行く十二音(十二律)を三度繰返して出来る三十  
音符の下に記しました數字  
は音名で其下の假名は音符  
の讀み方であります。



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 斗 爲 巾

7 3 4 5 6 7 1 2 3 4 5 6 7 1 2 3 4 5 6  
ナ ミ ヨ ナ ミ ヨ ナ ミ ヨ ナ ミ ヨ ナ ミ ヨ

右の譜表中、音符の上に附しました ○ ◎ は、押方の強弱の記號、○ は半押(半音高まる) ◎ は本押(一音高まる) ◎ は強押(一音半高まる)であります。尙お箏の押手は三味線の甲所と同じで、絃を適度に押して出すのですから充分注意して押すことに致さなければなりません。

お箏の調子即ち調絃法は、平調子を中心として、種々に變つて参りました、其調絃法に連れ、自然に曲の趣が夫々違つて参りますが、普通は平調子と雲井調子と云ふのを主に用ひます。雲井調子に合せました絃の音は次の譜表の通りであります、つまり平調子の三と八との絃を半音(一律)下げ、四と九との絃を一音(二律)上げたのに當ります。

雲井調子 調絃法

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 斗 爲 巾

7 3 4 6 7 1 3 4 6 7 1 3  
ナ ミ ヨ ナ ミ ヨ ナ ミ ヨ ナ ミ ヨ

平調子、雲井調子の外、曙調子、中空調子、古今調子、本雲井調子、片雲井調子、岩戸調子、半岩戸調子等の平調子或は雲井調子、と異りたる點のみを次に記す事にし、其他の調絃法に對する絃の合せ方を、一々挙げるのは餘りに煩はしいので此處には略して他日必要に應じて其都度調絃法と記譜法とを示して御話する事にいたします。

曙調子は平調子の六と斗の絃を半音(一律)上げたのです。

中空調子は平調子の六と斗の絃を半音(一律)上げ七と爲の絃を一音(二律)下げたのです。

古今調子は、平調子の二の絃を七と同音に上げて合せ四と九の絃を一音(二律)上げたのです。

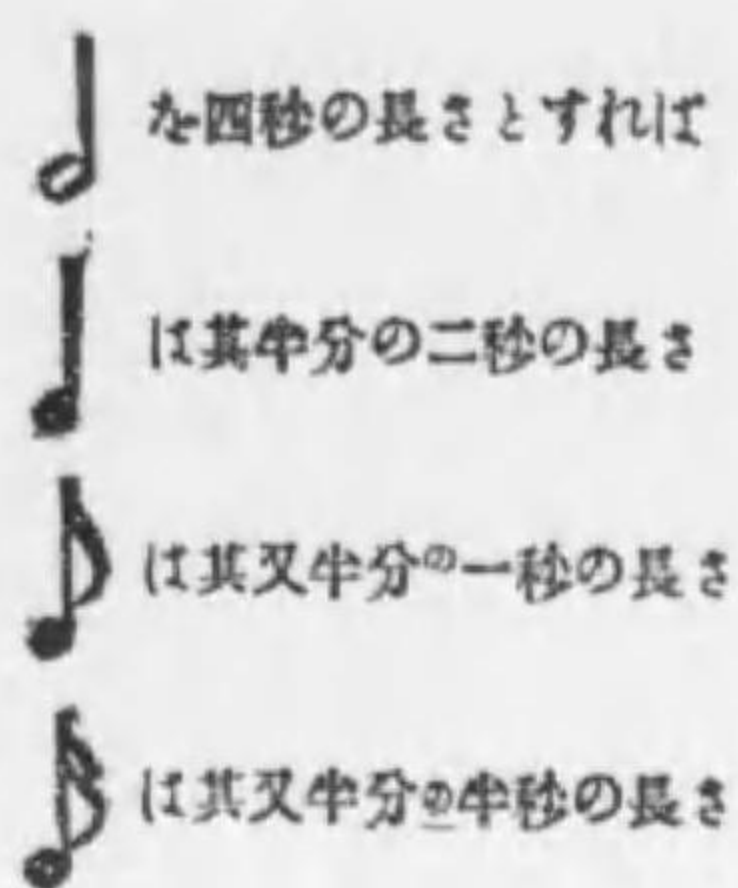
本雲井調子は、雲井調子の巾を半音(一律)下げたのです。

片雲井調子は、平調子の八の絃を半音(一律)下げ九の絃を一音(二律)上げたのです。

岩戸調子は雲井調子の五と十の絃を半音(一律)下げ六と斗の絃を一音(二律)上げたのです。

音符には、音の長短に應じて、數種の區別がありまして、左圖の通りであります。





即ち黒玉は白玉の半分の長さで、尙之に附する、符尾(六)等の形で時間の差を表はします。此符尾は、便宜上、次の音のものと結び附ける事(七)を と記し (八)を と記すの類(九)がありましても、總て時間に變りはありません。

お箏の手と唄の節とは、間拍子と申して、一定の時間の區切りを附けて、進行するものでありまして其間拍子には、三拍子や四拍子や種々ありますが、箏曲は普通表間と裏間の二拍子に依つて居ります。

例へば、裏間の如く手で膝を打ち手が膝に當る方が表間で、手を上げた方が裏間でありませう。

表間は稍強く當る心持で裏間は稍弱い心持であります。例へば、組歌の初めの拘爪の如き表間は、強く爪をあて、裏間は弱く弾く心持があります。是等は此表裏二拍子の心持を能く現はしたものとと思はれます。

音曲は總じて種々の音が斯くの如き強弱の順を追うて進行するものでありますが、それを取違へて逆の間に進む時は、聞きぐるしく、且つ不愉快になります。尤も曲に依て殊更逆の間を用ゐる例もない

ではありませんが、全曲の終りなどは、表拍子で治まらねばなりません。五線譜の縦線は、間拍子の區劃を記したもので、此縦線と縦線との間を一小節と申します。小節中の表間の音が裏間迄続きたる場合(左第一圖)又、表間と裏間と兩方へ當る音符(同第二圖)と表裏共二つに割れた場合(同第三圖)と其又表裏共四つ割れとなつた場合(同第四圖)との音符に相當する休みの記號とを對照して左に示します。

音符 休みの記號

例へば 此一小節を四秒の間とすれば 四秒の休の間

テ - - - ヲ - - - イ

二秒の間 二秒の間 二秒の休 二秒の休

テ - - テ - - ヤ ヤ

一秒 一秒

テ テ テ テ ヲ ヲ ヲ ヲ

半秒 半秒

テ テ テ テ テ テ テ テ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ

即ち白玉の音符を四秒間の長さと致しますれば、其下段の黒玉の音符は其半分なる二秒間の長さを二



表間二つ割れの頭が休みの場合表間斗りでンテテンとハズム

表間 裏間  
ン テ テン

裏間の休みの場合

表間 裏間  
テン ヤ

表間の音が裏間迄延びてハズム場合又表間の音符の下に有る點は音符の中間だけ餘分に延ばす記號であります

表間 裏間 表間  
コ — ロ リン

表間四つ割れの頭の休みが三つ目迄延びて急にンテテンと表間の中で前より一層早くハズム場合

表間 裏間  
ン テ テン

表間の休みの場合

表間 裏間  
ヤ テン

前の例よりも一層早くハズム場合

表間 裏間 表間  
コ — ロ リン

表間の頭が休み其裏が二つ割れとなり急にンコロリンとハズム場合

表間 裏間  
ン コ ロ リン

表間が休みで裏間が二つ割れに成つた場合

表間 裏間  
ヤ テ テ

表間の音符ばかりで前と同様にハズム場合

表間 裏間  
コ — ロ リン

表裏の頭が二つ割れで表裏の裏間が休みの場合

表間 裏間  
テ テン テン

裏間が休みで表間が二つ割れの場合

表間 裏間  
テ テ ヤ

表間四つ割れの二つ目が三つ目迄延びて表間斗りでテテンと早くハズム場合

表間 裏間  
テ テン テン

前と同じ二つ割れで表裏両間の頭が休みで音符が遅れて来た場合つまり表間の裏と裏間の裏に入つた場合

表間 裏間  
ン テン テ

表間と裏間に當る音符

表間 裏間  
テン テン

表間の裏が裏間の頭まで延びた場合

表間 裏間  
テ テン テ

表間の音符が二つに割れた場合

表間 裏間  
テ テ テン

表間が四つ割れに成つた場合

表間 裏間  
テ テ テ テン

裏間の音符が二つに割れた場合

表間 裏間  
テン テ テ

表間の裏が二つ割れに成つた場合

表間 裏間  
テン テ テン

表と裏と両方共二つ割れに成つた場合

表間 裏間  
テ テ テ テ

つ連ねたので、尙其下のは一秒間のものを四つ、其次は半秒間のものを八つ連ねたのであります。符尾は上向でも下向でも同じ事です。休みの間は、四秒間を假に、在來の習慣通りの掛聲を用ゐるましてヨイとし、其半分の休みをや、又其半分をン、尙又、其半分をハと定め記入する事にしました。尙、右の音符と休みの間等を種々に組合せた場合を左圖に示します。



表裏の頭が休み其表裏の裏間が二つ割れに成つた場合つまり表裏の裏間へンテテンテテと入るのであります

表間 裏間

ン テ テン テテ

表間が四つ割れで裏間の休みが二つ割れに成つた場合

表間 裏間

テ テ テ テン

表間四つ割れの頭が休みで三つ目が四つ目迄延びた場合

表間 裏間

ハ ト テン テン

は高音部記號と申しまして、これに依て調子の根本の位置を定めるのであります。其脇の

24 は前に述べました(間拍子の處)如く、全曲が表間、裏間の二拍子で進行すると云ふ事を表はしたのであります。

♯(嬰と申)は音を半音高める記號であります。そして譜表の冒頭に此 ♯ が記してある場合は全曲を通じて

の如くヨの音がヤとなります。

♭(嬰と申)は半音下げる記號であります。そして譜表の冒頭に ♭ の記號が附してある場合は、全曲を通じて

の如くナ音がネとなります。

は本位記號と申しまして、嬰、變、の記號に依て上げ下げしたる音を、例へば

の如く一小節中にて、上圖のヤがヨに復し、下圖のネが、ナに復する場合に用ひます。

或は

は同じ手や節を反覆す記號であります。

前まへの分ぶんとは同じ手又は節を意味する記號であります。

○は音符を適宜に延ばす記號で、拍子以外に適度の間を延ばすのであります、例へば全曲の終りの前などには必ず、之を用ゐて音を延ばして弾き治めます。

V はスタヒの記號であります。

△は、ハジキの記號であります。

(詳細は後頁の譜記法に記してあります。)

は右手法圖にある引連、半引連、裏連、流爪、引捨等に記入してある如く弾止める前の音をかけて弾く場合と又全曲の終りの前には多く裝飾音符として用ゐてあります。然しこれがある爲に別に間がのびるのではなく間を他の音符から借て音を表はすのであります。

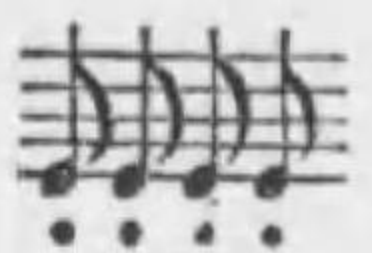


一 はスターと云ふ、此記號が音符と音符との間に附してある時は音のつゞく場合と押手に用ひます。リ はかすめる記號で音符の上に此記號を附したる場合は、音をかすめて弾くのであります。< は、爪を強くあて、強く、記號であります。

右手の1は拇指(前爪) 2は同食指(脇爪) 3は同中指(向爪)の順で凡て音符の上又は側に記してあります。但し拇指の記號は、特別の外は、凡て略す事にしました。即ち数字の附して無いのは凡て拇指で弾くのであります。

指遣ひの数字の右に(2又は3) 横線の附してあるのは「同じく」と云ふ意味で同じ指遣ひを續ける場合であります。又右手法の内にある中指に食指を添へる場合は前練習の譜に委しく記し本譜には略して3の指だけ附する事にしました。

X は掛押の記號であります。詳細は左手の説明に述べてあります。



此の如く音譜に點を附しある時は音をきざむ場合です。

唄の記號

、 は息繼の記號であります。

文句の假名の間の横線は節を引く産字の記號であります。

△ は次第に張る記號。

▽ は次第に弱くなる場合の記號。< は強く當る記號。P は弱く當る記號。

唄の譜は、前に説明しました、箏の譜の書方と全く同一であります。故に箏の譜が解る様になれば自然と唄の譜も解る事になります。又節の出來難い處は、唄の譜を箏で弾て見れば、唄ひ方も容易に解ります。

唄の譜はお箏の手と別々にして、上下二段に記すのが普通であります。夫では見透しが困難になりますので、此箏譜では、田中博士のお勧めで箏の手と同じ五線の上に、唄の音譜をも、赤色にて記す事としまして成るべく早解りの出來る様にいたしました。其の爲手と唄との關係が一目明瞭になり至極便利であります。

極初歩の曲では、唄は殆んど手と同じに誦みますが、漸々進んで行くに従ひ、手よりも遅れる唄ひ方もありますし、又手と離れて唄ふこともあります。これらの場合でも、努めて實際の唄ひ方を其の儘寫すことに致しましたので、殊更この譜の書き方の長所が顯はれて居ります。又歌の文句は成可く明瞭に「人」が「し」と「ならぬやうに」弾てを「しいて」と言はぬ様に致したいのです。歌を唄ふ時は可成開口即ち口のあけ方に注意して、例へば「は」と云ふ時に「わ」にならぬ様、口を充分に開いて唄ひまた「ん」と云ふ場合に「う」とか「む」にならぬ様口をむすんで唄ふ様に、兎角文句をはつきり唄はないと興



味も薄くなります。唄をうたひながら、首を振つたり身體を動かしたりするのは、見苦しいもので、又拍子を取るに、特別の場合の外は人に知られぬ様に致したいのであります。

右手法説明

- 一、拘爪は食指より中指の順に前の方へ後頁にある圖の如く拇指で弾きとめるのです。
- 二、半拘爪は初めの小節表間を食指で弾き、裏間を休み次の小節は、前の拘爪と同じです。
- 三、搔手は結びつけたる二絃を同時に俗に云ふ「シヤン」と中指で弾くのです。
- 四、割爪は例へば一、二、の兩絃を食指より中指の順に前へシヤンと掻き、五の絃で弾きとめる。



圖にある如くはを略して記したのでありますから、兩音符の符尾に斜に線の附して

ある場合には（拍子の關係で他の書き方もありますが）大方は割爪と心得てよろしいのです。

- 五、合爪は高低の二絃を、拇指と中指で同時に合せて弾くのです。
- 六、押合爪は爲の絃を本押（一音高める）し巾の絃と同時に拇指でツレンと、巾と同音に弾くのです。
- 七、引連は、一二の二絃を同時に中指でシヤンと掻いて箏の平面をかすつて走らせ爲、巾で食指にかはるのです。
- 八、半引連は五、六、の絃を中指でシヤンと掻いて、絃の平面をかすつて爲、巾で食指にかはり、前

へ弾きます。

- 九、裏連は巾の絃へ食、中、の爪を、掌を上へ向けて急に、手をかへして、次の音へナーラソンと拇指で弾きとめるのです。
- 十、輪連は示したる絃の平面を、食、中の爪の脇にてシユーと撫でるのです。
- 十一、流爪は、巾、爲を、拇指で向ふへあて、箏の平面をかすつて、二、一、の絃へ拇指のまゝ彈流します。
- 十二、引捨は一、二、の二絃を中指で同時に前へ絃の平面を撫でる心持にて、斗の絃にて、食指に變つて弾きとめます。
- 十三、波返しは巾の絃へ食、中指をあて、直に手をかへし、次に示したる絃にて横に柱の方へシユーと撫でるのです。
- 十四、散爪は圖の如く絃の平面を一本づゝシユーと中指の爪の脇にて、左の方へ撫でるのです。
- 十五、指爪は食、中指を圖に示したる二絃の間に入れ絃のわきを左へ磨り、又右へ返して撫でるのです。
- 十六、拘爪は絃を拇指にて拘ひます。
- 十七、ハジキは食指で絃をハジクのであります。



普通は右でハジキますが左の食指でハジク場合もあります。

十八、添へ手は柱の右脇の絃の下より、左手の拇指或は食指を添へて音を消して弾くのです。

十九、打手は絃の平面を中指或は食指の爪の平で上よりハヅマセる心持で打つのであります。左押し。

一、押は弾いた後を左手の食指、中、無名の三指で、次の音の始まる迄押すのです。

二、控は弾いた後を直に左の食、中、無名の三指で押し突き放つのであります。

三、臚は弾いた絃を左手で掴み柱の方へ引いて、音を低くめて放すのであります。

四、搖は弾いた絃を食、中、無名の三指で度々押し音を揺るのです。

五、押響は弾いた後の音を、押して餘韻を出すので、ツマリ遅く押せばよいのです。

六、重押は弾いた絃を、一旦半音だけ押し止めて又半音押すのであります。

七、掛押は示したる高音の絃を拇指で強押(一音半音高まる)し次の低い音の絃を食、中、無名の三指で

半押(半音高まる)し即弱く押すのです。此押方は音の廻り上必要が起るので普通の押方より間

拍子の速い場合、又は押す可き絃の接近したる場合杯には普通の押手では間に合ひませんので此

押方を用ひます。又絃が強くめめてあると始は中々押し難いものですから豫め練習を要します。

尚押手も無論間拍子を正しく押さなければなりません。それを遅れて押したり、押すのが間に合はな

い爲、右手の間が遅れる事杯ないやうに、又目的の音が、一定の間迄保たなければならぬものを、  
押す手を速く放し、絃のゆるんだ音などさせる事は嫌ひます。又揺る處でもないのに徒らに押す手を  
動かしたりする事もよろしくありません。  
初心の中は兎角左手が自由になりませんから押手の處は先きに押し待って居る位にし、弾いた次の  
絃に、右手がうつつてから、靜かに放す位にしなければなりません。  
以上は右手法及び左手の遣ひ方をお話ししたたのであります。尙音符に就いて右手法及左手(押  
手)等を別頁に部分的に記して、曲にうつる前練習、即ち爪調べとする事に致しました。順序として  
も、此の手法を練習してから、曲にかゝれば、自由に彈奏する事が出来ます。曲は申す迄もなく、凡  
ての手法をつなぎ合せたものですから、手法さへ、正確に彈く事が出来れば曲を樂に彈きこなす事が  
出来るのであります。

華譜練習の心得

の心得

此譜に就て御稽古の際は、練習が第一の要點で大切な事でありませぬ。

そして初めは譜と筆とをよく對照して、音符と絃との所在を會得し、馴れるに連れて、譜を讀みなが  
ら絃を見ずに、手さぐりで自然に音符通りの絃を、彈き當てる位になる迄は度數を重ねて一小節が出



来たらず、次の小節にうつる様に、少しづつ、の手をかためて練習する事を望みます。  
 お箏に限りません、音楽は凡て音律間拍子等が、正確に曲の大體が出来て後、味ひ杯も出るので、曲の大體も、満足に弾くことが出来なくては味ひも何も有つたものではありません、最早此處は合爪であつたが、又一本で弾ひたか、又は此處はスタヒ爪が幾つ有つたか杯、徒らに苦心する時代ではありませんが、譜に依て會得して練習を重ねれば如何なる煩はしい箇所も譜さへ開けば、直に弾く事が出来ます。殊更段物の如きは譜の効力も著しく、わづかの手のちがひ殆んど似よりの手を連ねたものなどになると、馴れるに従つて、自然に、誦誦されて、譜は目印位になる迄に至てこそ遺憾なく譜が應用されたものと申せます。然し、それをおもひちがへて、譜さへ解ればもう出来上つた氣で、ろくに練習もせず、先きへ々々々と他の曲に移りたがるのは戒むべきことで、これが段々度重なること、遂には満足に弾く事が出来にくくなり、これは譜に就てばかりではありません。從來の御稽古でも同じ事で練習を丁寧にならなければならぬ事と又吳吳も譜を濫用する事の誤りである事を茲に申し述べて置きます。譜を應用して之れによつて皆さんが苦もなく斯道を樂む事が出来る様になることを希望いたします。

彈奏法

彈奏法

圖の如くお箏の角より凡そ一寸位はなれた處へ、右手が當る様に又左手は柱の左の方の絃の上に置いて姿勢を正しく坐つて弾くのであります。尤も山田流はお箏の正面に向ひ、生田流は左の方へ斜めに向つて坐ります。各流派に依つてそれと相違もありませんが、要するに、うつむかぬ様に、音聲の出し宜い様に坐るのであります。凡て初めのならはしが大切に可成悪い癖のつかぬ様萬事に注意を要します。

爪は丸爪を用ひます。そして拇指より食指、中指の順に、凡て指の腹に爪の裏が當る様に箏めるのです。爪袋はゆるいと弾き始めてからぬけたり兎角力が入りません、固い位の方が力が入つて、従つて音もよく出ます。又爪をはめる時に指先を舌で舐るのは、不衛生、且つ危険が伴ひます、爪しめしを用ゐる方が見た眼にもよろしう御座います。右手は可成爪を立て氣味に向ふへ押す心持でかた

彈奏の圖

くならぬ程度に、力を籠めて弾くのであります。  
 尤も初歩の中は、拇指にばかり力が入りますが可成中指、食指(向爪)にも、力が入る様に弾く事を心掛けたいのです。  
 調子の定め方。





お箏の調子は年齢や男女の區別に依つて各々高低を定めるのです。それを辨へずに調子を合せると、或る時は聲が出にくくなつたり、又ある時は全く聲が出ないやうになります。たとへば學齡位の女子に低い調子で聲を出さすれば勢ひ上聲で唄ふ癖がついて大人に成つても、聴苦しい上聲でなければ唄ふ事が出来なくなりませう。又男子が女子と同じ調子で無理に高い聲を出して唄ふのは最も聴苦しいものであります。總じて銘々の、のどに應じた調子に合せて唄ふ事に致したいのです。

お箏の調子の高低を定むるには調子笛を用ひます。お箏の調子笛には、昔から四穴と申して象牙、竹紫檀等で出来たものがありますが、これは専門家が各自に製作しますので、賣品にはありません。これは最も完全なものとしてあります。けれども餘程、耳が發達して居りませんと聽分けるのに困難です。其外に八橋の調子笛と申して竹製で六本に成つて各々兩端から息を吸うて、十二律の音を出すのがあります。あらましの調子を合せるとは、先づそれで間に合ひます。この十二律を壹越、斷金、平調、勝絶、下無、双調、鳧鏡、黃鐘、鸞鏡、盤涉、神仙、上無と申して笛の上に配つてあります。調子笛に依つてお箏の調子を合せるのは大體次の如くであります。今お箏に用ひる調子を調子笛に就て合せ方を左に記して参考と致しませう。

先づ調子笛の、壹越と記した音を出してお箏の十の絃と同音に合せ次に、五の絃を、十の絃よりも十二律低い壹越に合せ、それと同音に一の絃を合せて、あとの絃は、これにならひて、合せたのを普通

六本の調子と申します。これより、高い調子、又低い調子は、それと次の表に記してある如く、笛よりお箏に移すのであります。

壹越	斷金	平調	勝絶	下無
十の絃に合せたるを	同	同	同	同
六本	七本	八本	九本	十本
と云ふ以下順に高音と成る	と云ふ	と云ふ	と云ふ	と云ふ

壹越	斷金	平調	勝絶	下無
爲の絃に合せたるを	同	同	同	同
五本	四本	三本	二本	一本
と云ふ以下順に低音となる	と云ふ	と云ふ	と云ふ	と云ふ 其他は略す

女子の調子は凡そ六本より十本位迄の内にて年齢或は、持前の聲の高低と曲に依つて適宜に定めるの



(十一) 裏 連  
ウラ レン



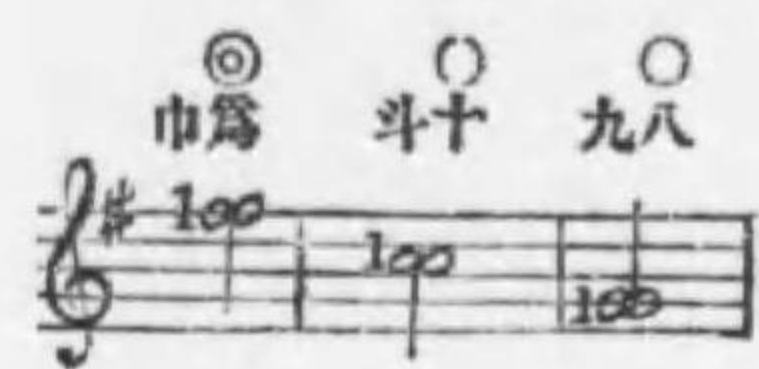
(六) 合 爪  
アソセ ツメ



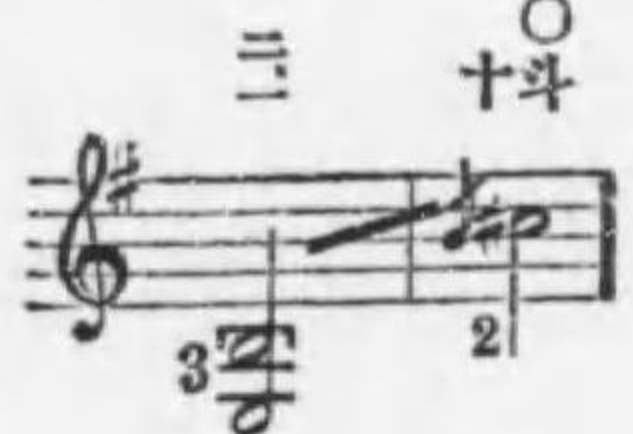
(十二) 流 爪  
ナガシ ツメ



(七) 押 合  
オシ アソセ



(十三) 引 捨  
ヒキ シテ



(八) 引 連  
ヒキ レン



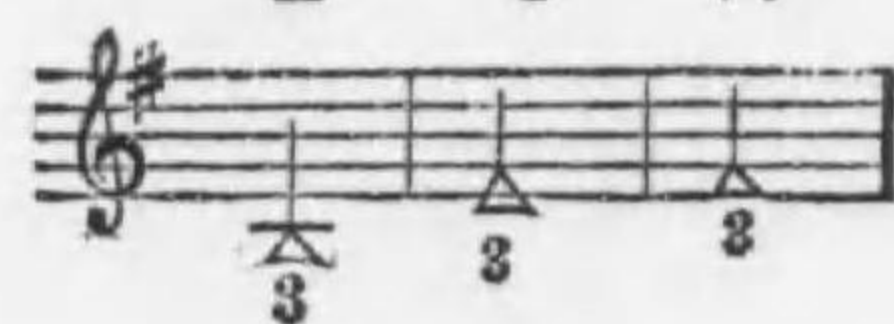
(十四) 波 歸  
ナミ ガヘリ



(九) 半 引 連  
ハン ヒキ レン



(十五) 数 爪  
ナラシ ツメ



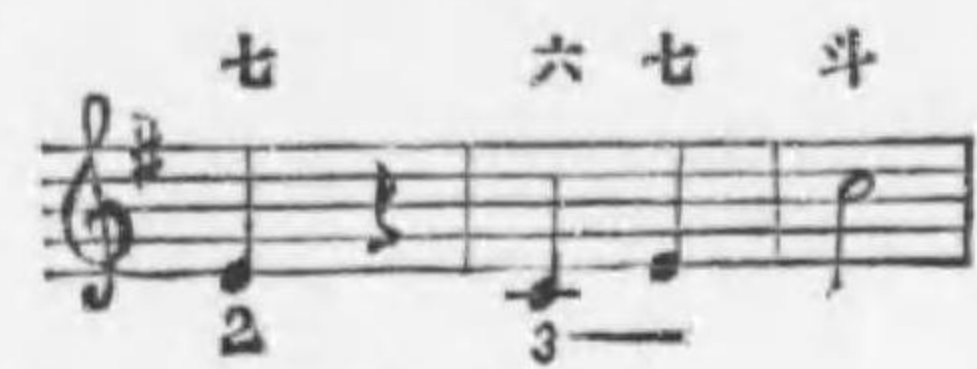
(十) 輪 連  
ワレン



(一) 拘 爪  
カケ ツメ



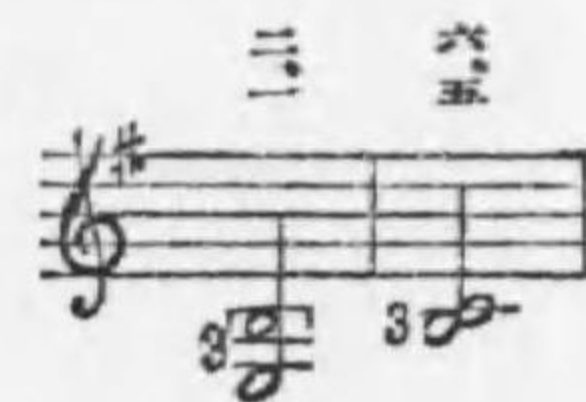
(二) 半 拘 爪  
ハン カケ ツメ



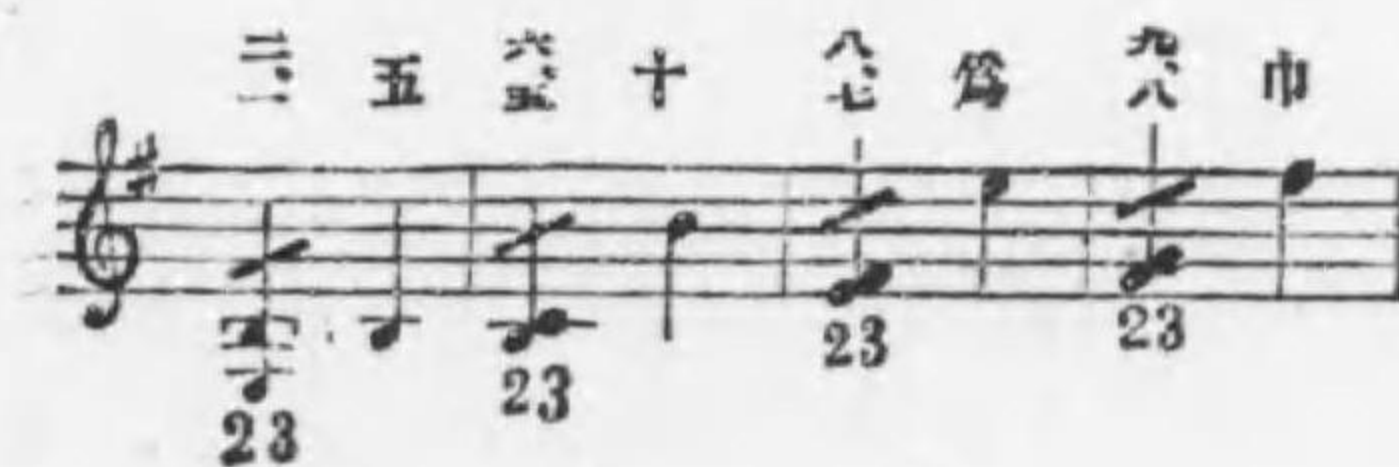
(三) 早 拘 爪  
ハヤ カケ ツメ



(四) 振 手  
カキ テ



(五) 割 爪  
ワリ ツメ



であります。男子は凡そ五本位より以下一本位迄の内にて、同じく聲に應じて調子を定めるのであります。

右手及左押手前練習音譜。



(五) 押響  
オシヒキ



(一) 押  
オシ



ひだりてはしるんよ  
左手左の通りであります。  
左手法音譜。

(六) 重押  
オキオシ



(二) 控  
ツキイロ



(七) 掛押  
カケオシ



(三) 懸  
ヒキイロ



(八) 同掛押  
カケオシ



(四) 揺吟  
ユルイロ

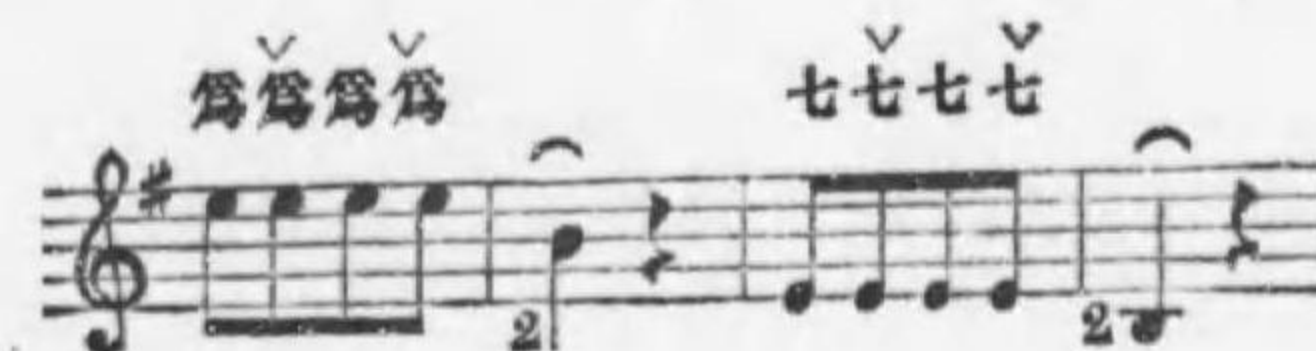


(十六) 指 爪  
スリ ツメ



(十一)

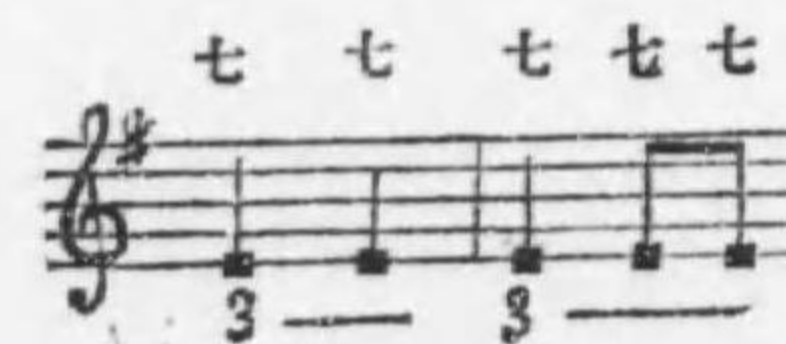
(スケヒ) (ハジキ)



(十八) 添 手  
ソヘ テ



(十九) 打 手  
ウチ テ





花競

梅の上たへ、梅のにはひ。

桃のうまいうら、こまきまげ。

杏のあやをさる柳。

歌の道

うぐひすもかづもらたふ

うたのみち。

月雪花のをりし。

こころうらうらにうたへ

たのしみ。

手習

さながらふあごよ、なにもづみ。

まごや、こらねる冬ごもり。

今を喜ぶどよみ雪の花。

あまのはな、にかならせえんよ。

新年の雪

具はなをまきり、ねもひも。

春はあられぬ、花はさき。

ひさしのはな、新ら。

年とかなり、つしけの雪

たのしみほかる、世のよ。

まごやか、見入てめでた。



姫松

ひめ松 小まつ、

ひめまつ 小松、

みどりの花ませ、春はこころよ。

梅

きんからきんから、やよひのるら、

見わたたまかきり、

かすみが雪、

いほひぞうのうしろのうしろ

あこやまんと。

四季の花

春の花、夏はたぎげか、

秋はきこく、

冬はきいせん、むろの梅。

鶯

鶯のうしろのうしろ、

たのしみ、うしろのうしろ、

うしろのうしろ、うしろのうしろ、

うしろのうしろ、うしろのうしろ、

うしろの花よ、うしろの花よ、



29

大正十一年七月十八日印刷  
大正十一年七月廿六日發行

箏曲樂譜與附

定價金壹圓

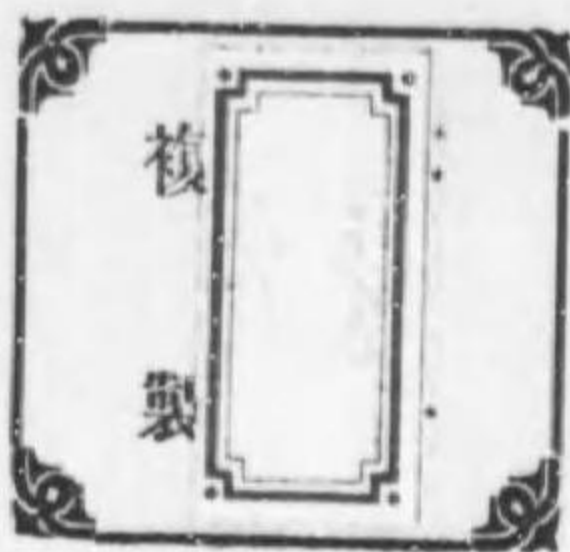
著者 落合康惠

發行者 東京市日本橋區大傳馬鹽町十八番地

松崎善太郎

東京市日本橋區大傳馬鹽町十八番地

印刷者 齋藤正雄



發行所

東京市日本橋區  
大傳馬鹽町一八

明誠館

電話神田一四〇六番  
振替東京一〇七〇八番



特116

587

入 入

終